

教育委員会協議会 会議録

平成29年度第5回教育委員会協議会

場所：四万十町農村環境改善センター 多目的ホール

(1) 開会及び閉会に関する事項

開会 平成30年1月15日(月) 18:00

閉会 平成30年1月15日(月) 20:17

(2) 教育委員会出席者及び欠席者の氏名

出席委員	教育長	田村 壮児
	教育委員	平田 健一
	教育委員	竹島 晶代
	教育委員	八田 章光
	教育委員	木村 祐二
欠席委員	教育委員	中橋 紅美

(3) 高知県教育委員会会議規則第8条、第9条の規定によって出席した者の氏名

高知県教育委員会事務局	教育次長(総括)	北村 強
〃	教育次長	藤中 雄輔
〃	教育次長	永野 隆史
〃	教育政策課課長	酒井 啓至
〃	高等学校課課長	高岸 憲二
〃	高等学校課企画監(再編振興室長)	山岡 正文
〃	高等学校課再編振興担当チーフ	池上 淑子
〃	高等学校課指導主事	野中 昭良
〃	高等学校課指導主事	清水 宏志(会議録作成)
〃	教育政策課指導主事	小島 丈晴(会議録作成)

【開会】

田村教育長	<p>ただいまから、県立高等学校再編振興計画の「後期実施計画」に関する、第5回高知県教育委員会協議会を開会させていただきます。初めに一言ご挨拶を申し上げます。</p> <p>本日は、県立高等学校の再編振興計画「後期実施計画」を検討いたします。高知県教育委員会協議会を開催いたしましたところ、ご発言をいただきます。佐川町教育委員会、川井教育長様、また、四万十町の森副町長様、川上教育長様をはじめ、この問題に関心を持っていただきます。多くの皆様にご出席をいただきました。誠にありがとうございます。</p> <p>この県立高等学校再編振興計画は、急激に減少します生徒の数をにらみながら、そして迫り来る、南海トラフ地震の津波への対応、そして、情報化やグローバル化が進展し、急激に変化する社会情勢、こういったことに対応するために、より良い教育環境の実現に向けた、県立高校の在り方を検討するために計画しているものでございます。</p> <p>平成26年の10月に、平成26年～30年度までの「前期実施計画」と併</p>
-------	---

木村委員	<p>せて、この「県立高等学校再編振興計画」を策定したわけですが、その中では、「前期実施計画」の期間中、ということは、平成 30 年度中に、平成 31 年～35 年度までの「後期実施計画」を策定するというようになっておまして、昨年の 10 月から、この検討をスタートさせていただいております。</p> <p>4 月には中間とりまとめを行いまして、12 月には「後期実施計画」を策定するという計画にしております。</p> <p>県立高校につきましては、特に郡部の県立高校につきましては、地元の皆様に、また地元の行政の皆様に、大変お世話になっております。一方で、県立高校に対する、様々なご期待も強くいただいているというふうに思っております。</p> <p>そういうこともございまして、「前期実施計画」におきましては、まず教育委員会の方で計画のあらましを作りまして、それを公表して、その後、ご意見をいただくというような形にしておりましたけれども、「後期実施計画」におきましては、県内ブロックを 5 つに分けまして、それぞれの地元で、この問題に関心を持っていただいている皆様にご意見をいただき、そのご意見をできるだけ反映する形で、計画を作っていくということで、こういった会を持たせていただいているというところがございます。</p> <p>本日は、佐川町と四万十町の方から、ご意見をいただくということになっておりますので、どうぞよろしくお願いしたいと思います。簡単でございますけれども、ご挨拶とさせていただきます。</p> <p>それでは、早速始めさせていただきますけれども、本日の議事録への署名人は木村委員、よろしくお願いいたします。</p>
木村委員	はい。

【議題】

○県立高等学校再編振興計画「後期実施計画」の策定について

田村教育長	<p>それでは、県立高等学校再編振興計画「後期実施計画」の策定について、高等学校課の方から関連資料についての説明をしてください。</p>
山岡企画監	<p>はい。では、資料ナンバーに従いまして、説明をさせていただきます。高等学校課企画監の山岡と申します。よろしくお願いいたします。</p> <p>資料 1 についてご説明させていただきます。県立高等学校再編振興計画は、平成 26 年 10 月に策定をいたしました。その実施計画の後期分、平成 31 年～35 年度の策定スケジュールを、この資料 1 に載せております。</p> <p>まず、「後期実施計画」の「中間とりまとめ（たたき台）」を今年 4 月に策定するに当たり、昨年 10 月より、教育委員会協議会という公の場で、広く県民の皆様の意見を聴きながら、取組を進めてきています。</p> <p>「前期実施計画」につきましては、事務局のみでたたき台を決めていましたが、今回の「後期実施計画」の策定は、たたき台を出す前の段階から、広く地域の皆さんの声を聴きながら、丁寧に進めていきたいと考えております。</p> <p>教育委員会協議会は、1 回目は全体会とし、2 回目～6 回目までは、東</p>

部、中部、北部、高吾、幡多の各地域に出向いて、地域別に、各地域内の学校についての再編振興に関する意見を聴く会議、地域会を開催することとしています。本日は地域会の4回目です。

7回目以降は、地域会で出た意見を踏まえながら、「中間とりまとめ（たたき台）」の策定に向けて、委員の皆様にご協議いただくことにしています。

平成30年度に入り、4月下旬ごろに「中間とりまとめ（たたき台）」の決定を行い、その内容を公表したいと考えています。

それ以降は、「最終とりまとめ（パブコメ案）」の策定に当たり、大きな影響が予想される学校の関係者、校友会やPTAなどにも参加していただき、開催したいと考えております。

今年の夏ごろに、「最終とりまとめ（パブコメ案）」を決定し、12月ごろには、「後期実施計画」を策定したいと考えております。

続きまして、資料2をご覧ください。津波浸水域の県立高等学校一覧でございます。

津波浸水域にある県立高等学校は、ここにありましており13校あり、最大クラス（L2）の地震・津波が発生した場合で、堤防なしの時の浸水深と、30cmの津波が到達するまでの時間を表にしています。

浸水深が最も大きいのは、県内では土佐清水市の清水高校で、浸水深が12mであり、この地域では、須崎高校が7mとなっています。

また、30cmの津波が到達するまでの時間が最も短いのは、県内では清水高校が11分であり、この地域では、須崎高校が28分となっています。

須崎高校につきましては、須崎工業高校と統合し、新たな須崎総合高校が、津波被害の想定されない須崎工業高校の敷地に、平成31年4月開校することになっています。

続きまして、資料3をご覧ください。地域別中学校卒業生数の推移についてご説明させていただきます。

「前期実施計画」でも、時点は違いますが、同じグラフを載せておりました。今回のグラフは、平成29年3月までが実績で、平成30年3月以降が推計となっております。

平成29年3月の卒業生は6,543人であり、平成25年3月を基準とした場合、4年間で▲（マイナス）238人、▲3.5%となっていますが、平成35年3月の卒業生は5,543人であり、10年間で▲1,238人、▲18.3%となっています。

平成25年3月を基準とした場合、平成29年3月の卒業生を地域別で見ると、高吾地域が▲118人、▲15.9%と、減少した人数、減少した割合ともに他の地域に比べて大きくなっています。

平成25年3月を基準とした場合、平成35年3月の卒業生を地域別で見ますと、減少すると見込まれる人数は、中部地域が最も多く551人、次いで高吾地域、幡多地域がともに252人となっており、減少すると見込まれる割合は、北部地域が最も高く36.5%、次いで高吾地域が34.0%となっています。

続きまして、資料4をご覧ください。平成27年度以降の入学者数又は在籍者数の実態について、ご説明させていただきます。

平成27年度～平成29年度までの全日制、多部制単位制（昼間部）、多部制単位制（夜間部）、定時制（夜間部）ごとの入学定員、入学者数及び在籍

者数の一覧表です。

県立高等学校再編振興計画における生徒数の最低規模について、まずご説明させていただきます。

全日制の本校の最低規模は、1学年2学級以上を必要としています。

ただ、過疎化が著しく近隣に他の高等学校がないといった、中山間地域の学校は、最低規模を1学年1学級20人以上などとすることにより、できるだけ維持することとしています。

また、不登校や中途退学を経験した生徒、発達障害のある生徒などを受け入れる体制を整えた学校についても、最低規模を1学年1学級20人以上として、維持することとしています。

また分校は、本校や地域との連携に取り組みながら、教育の質を維持するために、最低規模を1学年1学級20人以上としています。

また、定時制夜間部の学校は、学校全体の生徒数、在籍者数を20人以上に緩和し、各地域での維持に努めることにしています。

それぞれの学校の最低規模がどのようになっているのかは、表の右の「最低規模」という欄があり、該当するものに「●(黒丸)」印が付いています。

それぞれの年度において、白抜きとなっているのは、最低規模を下回っている学校です。

濃い網かけとなっているのは、入学定員に対して入学者数が40人、1クラス以上少ない学校、学科であります。薄い網かけとなっているのは、入学定員に対しまして入学者数が半分以下の学校、学科であります。

高吾地域の状況について、まず全日制からご説明いたします。

須崎工業高校は、平成29年度から学科改編があり、4つの学科から3学科、6専攻、すなわち、機械系学科の機械専攻と造船専攻、電気情報系学科の電気専攻と電子情報専攻、システム工学系学科の機械制御専攻と住環境専攻となりました。定員も160人から、平成29年度以降は120人となっています。

平成29年度は、電気情報系学科の電気専攻が9人、電子情報専攻が10人。システム工学系学科の機械制御専攻が2人となり、それぞれ定員20人に対して、半分以下となっております。

須崎高校も、平成29年度から学科改編があり、総合学科から普通科となりました。定員に変更はなく、定員120人に対して、平成27年度～29年度までの入学者数は、64人、97人、92人となっています。

続きまして、佐川高校は、定員80人に対しまして、平成27年度～29年度までの入学者数は、52人、47人、35人となっています。平成29年度の入学者が35人であり、定員に対して40人以上下回っていますが、最低規模は1学年1学級20人以上なので、最低規模は上回っております。

窪川高校は、定員80人に対しまして、平成27年度～29年度までの入学者数が、それぞれ34人、41人、26人となっています。平成27年度、平成29年度の入学者が、それぞれ34人、26人であり、定員に対して40人以上下回っています。最低規模は1学年1学級20人以上なので、最低規模は上回っております。

檮原高校は、定員80人に対しまして、平成27年度から29年度までの入学者数が、それぞれ56人、32人、43人となっています。28年度の入学者が32人でありまして、定員に対して40人以上下回っていますが、

	<p>最低規模は上回っております。</p> <p>続きまして、四万十高校は、自然環境コースを含め、普通科の定員 80 人に対しまして、平成 27 年度から 29 年度までの入学者数が、20 人、20 人、13 人となっています。平成 27 年度と平成 28 年度の入学者が 20 人であり、定員に対して 40 人以上下回っているという状況にあります。また、平成 29 年度の入学者が 13 人であり、この年度につきましては、1 学年 1 学級 20 人以上という最低規模を下回っております。</p> <p>続きまして、A 3 の右側の定時制夜間部の表をご覧ください。1 年生から 4 年生までの在籍者全体で、20 人以上ということが最低規模となっております。</p> <p>須崎高校の定時制夜間部は、平成 29 年度の在籍者数が 17 人となり、最低規模を下回ることでございます。</p> <p>佐川高校の定時制夜間部は、平成 29 年度の在籍者数が 22 人であり、最低規模を上回るということになっております。</p> <p>続きまして、資料 5 をご覧ください。「前期実施計画」からの継続検討事項、及び適正規模に関する検討事項であります。</p> <p>この地域では、県立高等学校再編振興計画で定めた適正規模に関する検討事項として、(1) 本校と (5) 定時制(夜間部) が該当いたします。</p> <p>ただ、適正規模に関する検討といいますが、単に生徒数だけで決めるということではなく、それぞれの学校の持つ、学びの機会の保障といった重要な役割ですとか、学校や地域の振興策も踏まえて、検討していきたいというふうに考えております。</p> <p>また、本日の地域会でお聞きする地域の皆様からのご意見を十分に聴きながら、取り組んでいきたいというふうに考えております。</p> <p>県立高等学校再編振興計画では、本校の最低規模につきましては、先ほど申しましたように、原則として、高等学校としての教育の質を確保するため、1 学年 2 学級以上必要としています。</p> <p>ただし、過疎化が著しく近隣に他の高等学校がない学校や、不登校や中途退学を経験した生徒、発達障害のある生徒等への支援体制を整えた学校につきましては、特例として、1 学年 1 学級 20 人以上を最低規模として維持することとしています。</p> <p>この点、現状課題としましては、先ほども申し上げましたけれども、四万十高校が、平成 29 年度の入学生が 13 人となり、本年度、最低規模を下回る状況となっています。</p> <p>また、定時制夜間部は様々な学びを保障するため、学校全体の生徒数 20 人以上ということを最低規模としています。</p> <p>先ほども申し上げましたとおり、須崎高校の平成 29 年度在籍者数が 17 人となり、最低規模を下回ることでございます。説明は以上です。</p>
田村教育長	委員の皆さんは、もう何回もお聞きになっている内容ということですので、よろしいですか。
各委員	はい。
田村教育長	それでは、確認をいただいたということで、次に移りたいと思います。

○高吾地域の県立高等学校の現状、今後の状況について

田村教育長	それでは、続きまして、高吾地域の県立高等学校の現状について、高等学校課の方から説明をしてもらいます。
山岡企画監	<p>続きまして、資料 6、「前期実施計画」で明記した学校の在り方に係る現在の状況について、ご説明をさせていただきます。</p> <p>最初に、須崎工業高校も須崎高校も、須崎総合高校の一期生として卒業する生徒が、すでに平成 29 年度に入学して来ております。</p> <p>最初の須崎工業高校は、ものづくりを通じた防災減災活動が評価され、今年度、文部科学大臣表彰（学校安全）を受けております。</p> <p>造船部は、ソーラーボートの競技大会において、スラロームでは 5 連覇、周回レースでは 4 連覇を達成しています。</p> <p>進路保障に努め、就職内定率 100%、進学決定率 100%を毎年実現しております。就職につきましては、過去 3 年間を平均すると、県内が 46%、県外が 54%になり、県外の就職率が高くなっております。</p> <p>これまでの伝統や強みを生かし、さらに充実した教育内容として発展させることをねらいとしまして、先ほどもご説明しましたけれども、平成 29 年度から、工業に関する学科を 3 科 6 専攻に学科改編しております。</p> <p>続きまして、須崎高校でございます。</p> <p>須崎高校の全日制は、防災プロジェクトチームを中心とした防災減災活動など、防災教育をキャリア教育の視点で実践するといった取組が評価され、平成 28 年度、内閣総理大臣表彰（安全功労者）を受賞しております。</p> <p>進路については、過去 3 年間の平均が、進学が 8 割強（半数が 4 年制大学）、就職が 2 割弱（内 7 割が県内、3 割が県外）であります。なお、国公立大学への進学者は、平成 26 年度 11 人、27 年度 7 人、28 年度 9 人となっております。</p> <p>そして、1 年生から大学進学クラスを設け、3 年間の指針に基づいた、大学進学に向けた学力向上のための学習を実践しています。</p> <p>この点に関連しまして、須崎高等学校の PTA 会長様から 12 月に、須崎総合高等学校の全日制普通科について、進学拠点の指定をしてほしいといった要望が来ております。この A 3 資料の次のページに載せております。</p> <p>簡単にご紹介させていただきます。12 月 26 日付で来た、A 4 の資料を付けております。簡単にご紹介いたしますと、「高知県西部において、進学希望生徒を多数抱える高等学校は、高知西高等学校より以西は中村高等学校です。両校の中間地点としての高吾地域にも進学の拠点校が必要と考えます」というところで、新しい学校としてスタートするに当たり、進学校としての位置付けや施策を期待するというものでございます。</p> <p>高知市内に行かなくても、希望する難関大学や専門学校に進学することが可能となれば、月額定期代など保護者の負担軽減、そして部活動の充実につながるというものでございます。</p> <p>A 3 資料、資料 6 に戻りまして、須崎高校の所から説明させていただきます。</p> <p>平成 29 年度から、カヌー一部が運動部活動の強化推進校 B に指定されています。</p> <p>そして、須崎高校の定時制夜間部は、定通併修などにより、3 年間で卒</p>

業できる三修制を導入しています。定時制も平成 31 年 4 月に、須崎総合高校として開校することになっています。

続きまして、3 番目の佐川高校でございます。

佐川高校の全日制は、「いのち輝け さくら咲くプロジェクト」と名付けた地域課題解決学習を実施するほか、学校協働本部を設置し、佐川町・越知町・日高村・仁淀川町との連携協力を深め、学習内容の改善、発展に努めています。

「佐高検定チャレンジ支援制度」によって、検定試験の費用支援を実施しています。

また、「佐高ボランティアバンク」において、生徒の地域での活動を促進しています。

また、ソフトボール部は、運動部活動の強化推進校 B に指定されております。

進路につきましては、過去 3 年間の平均は、進学は約 7 割（内 2 割が 4 年制大学）、就職が 3 割（内 7 割が県内、3 割が県外）であります。なお、国公立大学への進学者は、平成 26 年度が 4 人、27 年度が 2 人、28 年度が 1 人です。

佐川高校の定時制夜間部は、定通併修などにより、3 年間で卒業できる三修制を導入しています。また、加力補習が必要な生徒には、1 時間早く登校させ、補習を実施するなどをしております。

続きまして、次のページにまいりまして、窪川高校でございます。

窪川高校は、高校生が地域のイベント等に参画する場づくりなどに積極的に取り組んでおりまして、毎年、四万十町長・教育長などとの意見交換会を、高校 2 年生が実施しております。

平成 28 年度からは、四万十町が公設町営塾「じゆうく。」を開設し、校内でのインターネット学習教材の活用とともに、基礎学力の定着と学力向上に取り組んでいます。

2 年次から 2 つのコースを設け、大学進学コースでは年間を通じた進学補習の実施や、関西地区の大学訪問などを通して、進学する意識と学力向上に努めております。

地域リーダー養成コースは希望者も多く、農業・商業・家庭に関連付けながら学び、実習等を通じて、将来、地域社会で活躍できる人材育成のためのプログラム開発などを行っております。

文部科学省の遠隔教育の指定を受け、四万十高校との遠隔教育を実践し、専門科目の講座開講を推進しています。

進路につきましては、過去 3 年間の平均は、進学が 7 割（内半数が 4 年制大学）、就職が 3 割（内 7 割が県内、3 割が県外）であり、年々、進学の割合が高くなってきています。また、国公立大学への進学者は、平成 26 年度が 3 人、27 年度が 3 人、28 年度が 1 人です。

続きまして、橋原高校は、橋原中学校との連携型中高一貫教育を行っております。中学校との授業連携や中高一貫合同会議の開催などを行っております。

総合的な学習の時間に、橋原で学び生活していくことをテーマとした、「YELL プロジェクト」による地域との連携や、津野山神楽の継承・実践などを行っております。

	<p>月一回の生徒支援委員会の開催により、生徒理解に努める体制を整えております。</p> <p>平成 29 年度は、橋原中学校の卒業生の 9 割が橋原高校に進学し、併せて部活動を目的に遠方からも 10 人を超える進学者が入学するなどして、40 人を超える生徒を確保しています。</p> <p>また、野球部の活性化を通して、生徒募集に努めております。</p> <p>平成 29 年度から、アーチェリー部が、運動部活動の強化推進校 B に指定されています。</p> <p>進学補習などを充実させ、大学進学に向けた指導体制を整えております。国公立大学への進学者は、平成 26 年度が 2 人、27 年度が 3 人、28 年度が 2 人であります。</p> <p>続きまして、四万十高校は、大正・北ノ川・十川中学校との連携型中高一貫教育を推進し、中高の授業交流などを行っています。</p> <p>四万十町の支援により、ソフトボールの専門的な指導者を招いて、ソフトボール教室などを通して、小・中学校との連携を図っています。</p> <p>また、小・中学校 PTA と高校 PTA・同窓会との懇談会や、地域おこし協力隊と連携した取組を行っています。</p> <p>自然環境コースでは、研究機関や森林組合と連携して、フィールドワークや林業体験実習を行っています。</p> <p>また、スケジュール手帳を活用した学習計画づくりなどにも取り組んでおりまして、公設町営塾「じゆうく。」は、この学習計画を同級生とともに行動に移す場として役立っています。</p> <p>毎月の生徒支援会や、高大連携教育事業による研修会等を行い、生徒支援を実施しております。</p> <p>文部科学省の遠隔教育の指定を受け、窪川高校との遠隔教育を実践し、専門科目の講座開講を推進しています。</p> <p>進路につきましては、過去 3 年間の平均は、進学が 5 割（内半数が 4 年制大学）、就職が 5 割（内 7 割強が県内、3 割弱が県外）となっています。資料 6 につきましては、以上でございます。</p> <p>続きまして、資料 7 は、資料 3 の地域別中学校卒業生数の推移の内訳を、市町村ごとに記載したものでございます。私立高校などに行く生徒を除いた数字となっていますので、現在の中学生の数字などとは、必ずしも一致しておりません。説明は以上でございます。</p>
田村教育長	<p>高吾地域の県立高校の概況について説明してもらいました。ご質問、ご意見等ございましたらお願いします。</p> <p>これも大体確認をいただいたということで、よろしいですかね。</p>
各委員	はい。
田村教育長	<p>それでは、特にないようでございますので、次に移らせていただきます。</p> <p>次に、地域からのご意見をいただきたいと思っております。</p>

○地域からの意見聴取

ア 佐川町

田村教育長	まず最初に、佐川町の川井教育長さんから、よろしく願いいたします。
佐川町 教育長	<p>佐川町教育長の川井でございます。今日は、地域の声を聴いていただく機会を設けていただきまして、誠にありがとうございます。本来でしたら、町長が出席するべきところですが、ちょうど仁淀川流域の市町村長の研修会が、今日明日ございまして、私の方から代わりにご説明をさせていただきますので、よろしく願いいたします。</p> <p>それでは、まず何から話していいのか、色々あるんですが。まず佐川町が、どういった地域づくりを進めようとしているのか、そのビジョン的なものを、まず最初にお話をさせていただきたいと思います。</p> <p>現在、佐川町では、「第5次総合計画」というものを策定しております。これは平成26、27年度と、2年間かけて、現在の堀見町長が就任されてすぐ策定しまして、平成28年度から平成37年度までの9年間の町の総合計画、これは、まちづくりの指針ともいべきものでございます。</p> <p>この中では、ビジョンとしては「チームさかわ まじめに、おもしろく。」という、そういった内容を掲げておるんですが、佐川町民が一丸となって、持続可能な幸せなまちづくりを進めていこうというところでございます。</p> <p>町民の皆さんに、まちの課題に関心を持っていただき、自分事として捉えていただくなかで、行政と住民が一緒になって課題解決に取り組む、そんな佐川町をつくってみたいということです。この総合計画をつくる段階から、それぞれ地域へ出向いて行って、ワークショップを重ねたり、また年代別など、いろんなワークショップを重ねて、行政主導ではなく、地域の意見を取り入れた総合計画というものを策定しております。</p> <p>この総合計画を具体的に推進するために、教育でありますとか、産業、福祉など、7つの分野別方針と、それに基づく施策体系というものを策定しております。この中で、まちづくりの基本は人づくり、人づくりの基本は教育である、そういう思いから、7つの分野のトップに、教育を位置付けております。</p> <p>教育における主要施策の一つとして、魅力ある佐川高校づくりの支援というものを掲げ、現在、町内外から多くの生徒が集まり、教育が充実するよう、魅力ある佐川高校の実現を目指し、行政・地域・高校の連携を強化するとともに、地域資源を生かし、地域住民の力を借りて、特色がある授業や活動を実施するなど、まず地域と行政が積極的に支援する体制づくりを進めていこうとしております。</p> <p>また、まちづくりのもう一つの柱としまして、「佐川町まち・ひと・しごと創生総合戦略」というものを、平成27年度に策定しております。これは、計画年度は平成27年度から5年間の、31年度までとなっておりますが、要は人口減少の話でございます。この人口減少を緩やかにしていこうということでございます。</p> <p>その中で、雇用創出とか移住促進に取り組むこととしているんですが、農業・林業の振興による、担い手確保というものを掲げております。その</p>

ための施策の一つとして、ふるさと教育をしっかりとやっていこうということを位置付けております。

ふるさと教育については、後ほど少し説明をさせていただければと思っておりますが、これが基本的な佐川町の地域づくりのビジョンでございます。

こういったなかで、町としては、魅力ある佐川高校づくりの支援を掲げておるわけですが、佐川高校に対して望む学校像といいたししょうか、育ててほしい生徒像として、これは町長の想いがかなり反映されている部分ですが、少しその点をお話しさせていただきたいと思っております。

日本中の問題であり、高校からの教育だけでは実現は難しい内容ではありますが、一次産業である農業や林業の仕事に、夢や希望を持てる、誇りを持てる人間を育ててほしいと思っております。

佐川町では、来年度から教育研究所を立ち上げまして、ふるさと教育により一層力を入れていくことにしております。

そのなかで、小学校・中学校の時に農業や林業の仕事の魅力、楽しさ大切さを感じて、理解してもらえよう、カリキュラムの確立をしていこうと考えております。

あらゆる産業において、担い手不足が顕著になり、一次産業は今後ますます、担い手の確保が難しくなることが予想されます。高知県として、一次産業の仕事における担い手の育成・確保を図るためには、小学校の時から、高校生、高等教育へと一貫した教育の確立が必要であると考えております。

中山間地域に位置する佐川高校においては、この流域の持続可能性を考えた時、農業と林業の教育、現場研修を充実させた取組が大切ではないかと考えております。仁淀川流域の町村とも協議して、前向きにこういった取組を検討していただければと考えております。

町としては、そういったことで、ぜひ県教委の方で取り組んでいただければというふうに考えております。

こういったなかで、では、現在の佐川町内の中学生が、こういった進路状況にあるのか。そしてまた、中学生はどういった学校に進学したかっているのか。データのものを基に、少し説明もさせていただきたいと思っております。

まず、その前段ですが、毎年夏休み期間中に、町内3中学校の生徒会と町長、私どもが一緒になって意見交換を行う、中学生会議というのを開催しております。そういったなかで、中学生たちから学校行事の充実とか、いろんな面で要望も出てくるんですが、そのなかで、私どもから生徒に対して、佐川高校がどんな学校だったら、町内の生徒が行きたいと思う高校として選ばれるのか、という質問をしました。

その際に、生徒からの回答としては、やはり大学への進学、あるいは就職、そういった面で有利性があること。さらには、独自性のある取組、そういったことをやっている学校。また、学校の魅力を積極的に発信している、そういった学校であつたら、選ばれるんじゃないかというような回答がございました。

生徒たちは十分、佐川高校の実態を知らないなかでの部分があろうかと思っておりますが、生徒たちが現在の佐川高校に対して、そういう思いを持つ、

逆にいえば、佐川高校がそういう学校という認識を持っていないと、いうことになろうかと思っています。

そこら辺も実際、高校への進学状況のデータで少し見てみますと、佐川高校の生徒数は今年度 131 名で、うち、先ほどお話がありましたように、新 1 年生は 35 名でした。これが、10 年前の平成 19 年は 276 名の生徒数がありました。そして、新入生が 91 名ということで、ほぼ半減しております。生徒数は半減、新 1 年生はもう、3分の 1 近くまで減っております。

そういったなかで、やはりこの高吾地域で一番人口の多い佐川町とは、一体どういう状況であるかということですが。佐川町の場合は、ちょうど JR の駅がございまして、割と高知市内への通学の利便性が高い、そういったことが背景にありまして、小学校から中学校へ進学する段階から、私立の学校へ抜ける生徒が、毎年 10 名程度は出てきております。この春の卒業生の意向を聞きましても、今年の小学校 6 年生も 15 名程度は、私学へ行きたいというような希望が出てきております。

そういったなかで、町内の中学生では、今年の 3 月でございますが、こういった進学状況であったかを少し見てみますと、今年は 109 名の生徒が、中学卒業生として佐川町にいました。そのうち、佐川高校へ進学した子は、わずか 16 名、パーセンテージにして 15% ございました。

先ほど、須崎高校を進学拠点にという話があったんですが、いわゆる進学拠点校の高知追手前・高知小津・高知西に、109 名のうち 25 名抜けています。さらに、私立高校へ 10 名ということで、いわゆる大学進学を念頭に置いた生徒が、大体、私立と高知市内の進学拠点校を合わせると 35 名で、約 32% を占めております。

また、実業高校への進学状況を見てみますと、高知工業・須崎工業、ここに 15 名、高専に 4 名、いわゆる工業系で 19 名。高知商業・伊野商業へ 10 名。合わせていわゆる実業系へ 29 名、ここで 27% を占めておることです。進学を目指す子と、就職をどちらかといえば考えておる子と、合わせて約 6 割を占めております。そして、残り 15% が佐川高校へ進学します。

また、残り 15% は、例えば、特徴のある高知丸の内高校へ 4 名行ったりとか。あるいは、なかなか不登校の生徒が、近年ずっと出現しております。佐川高校定時制は 5 名。不登校の子どもの受け皿として、佐川高校の定時制は非常に、私どもも重要な学校であるというふうに考えております。

近年、佐川高校定時制には、大体 5 名～3 名程度、入学がずっと続いておりますので、引き続き、佐川高校定時制は、私どもとしては、大事な位置付けであるというふうに考えております。

このように、この春の卒業生の進路を見てみますと、109 名のうちわずか 15% です。これが 10 年前と比較してどうなのかというのを見てみますと、10 年前は、卒業生が約 150 名ぐらいいました。そのうち、10 年ぐらい前までは、大体 30% 前後の生徒が佐川高校へ進学しておりました。150 名程度生徒がいましたので、30% として 40 名ぐらいが佐川高校へ進学していたということです。

昔からやっぱり、地元の高校へ 30% しか行かないということは、元々、地元の方への進学率が低いという状況があるなかで、特に最近はもう 20% 前後、さらに今年のように 15% になってしまった。

これは、一つ見てみますと、やっぱり高知学区の廃止の影響、これも一部あるのではないかと見ております。

平成 22 年には、113 名の卒業生のうち、47 名が佐川高校へ進学しておりました。これがここ近年 10 年間で、一番佐川高校への進学者数が多い時でした。この時の、いわゆる進学拠点校への進学状況を見てみますと、高知追手前は全県一区でしたので、高知小津とか高知西へ行ったのは、合わせて 4 名しかいませんでしたが、この春、平成 29 年の卒業生は、高知小津・高知西へ 16 名流れております。やはりここら辺も、高知学区の廃止の影響が、少なからず見て取れるのかなということも考えております。

もう一つ、こういった進学に当たって、先ほど禰原高校が、野球でかなり生徒を集めておられるということですが、部活も高校選択の際には、重要な要素を占めていると考えております。

実は、佐川町内の尾川中学校と黒岩中学校との合同チームが、今年、全国中学校総合体育大会で優勝するという事になったんです。ソフトボールは非常に盛んです。しかし、中学校の生徒で、ソフトボールをやっている子どもの数は極めて少ないです。かなり、佐川中学校で、例えば見てみますと、現在、佐川中学校の生徒数が約 250 名程度いるんですが、サッカー一部に 40 名程度在籍しております。

今年、佐川町では、黒岩中学校を佐川中学校へ統合するという事を決定しました。その背景として、保護者、子どもたちの意向として、黒岩中へ行ってもソフトボールしかできない、自分は少年時代からサッカーをやっている、だから区域外通学で佐川中学校へ行きたい、という声が圧倒的に多うございました。

そういったことも受けて、来年の新生が、黒岩中学校にわずか一人になる。さらに現在の 5 年生も、黒岩小学校には 5 年生が 11 名いるんですが、保護者にアンケートを取りますと、そのうち 8 名の方は、区域外通学を使ってでも佐川中学校へ行きたいと、そういった意向を示しておりました。

そこら辺には、そういった子どもにやらしてあげたいことを、保護者としても、区域外を使ってでも支援したいというようなことが、意見交換とかアンケートの結果からは出ておりました。そういったことを見てみますと、部活ということも今後、考えていく必要があるのかなと思います。

ただ、生徒数が少ないなかで、なかなか多様な部活動は難しゅうございますので、そこら辺少し、即対応できるということではないとは思っております。

また、こういったなかで、現在、町として、また佐川高校の校区としては、日高村、佐川町、そして越知町、仁淀川町と 4 町村あるんですが、こういった支援をしているのかということ、少しお話をさせていただきたいと思います。

先ほど説明がございました、資料 6 ページに佐川高校の全日制の取組が載っておりますが、この中で、「いのち輝け さくら咲くプロジェクト」を、佐川高校が現在、取り組んでおります。

これは、総合的な学習の時間を活用して、生徒の意識を醸成するという、教育目標を達成するためのものなんですが、これについては、1 年生が地域資源を知ること、4 町村の色々な実態を学んでおります。

それに対して、4町村が受け皿となって、例えば佐川町でしたら、地乳をやっている吉本牛乳を紹介したりですとか、そういった学校と地域をつなぐ、そういった支援を4町村でやっております。それが入口の部分ですね。

それから、佐川高等学校協働本部が平成29年度から設置されておるんですが、この委員に、4町村プラス学校組合の教育長、5人の教育長がこの委員として参画をさせていただいて、佐川高校の取組を支援していこうということもやっております。

さらに、「佐高検定チャレンジ支援制度」ということで、佐川高校が検定試験の費用負担をやっておるわけなんですけど、その原資は4町村からの支援、助成金であります。年間35万円を生徒数で案分して、各町村で負担しております。そういった部分で活用させていただいております。これは全日制に35万円。また定時制に対しても、同じく35万円を、4町村が生徒数に応じて案分して、定時制のいろんな活動に利用させていただいておる、こういったことでございます。

また、それ以外でも、現在、佐川町では、「さかわ発明ラボ」というものをつくりまして、レーザーカッターでありますとか、先進機械を使っているものづくりをやっておりますが、そのためのレーザーカッターを佐川高校さんにお貸しして、佐川高校でもそういった取組をしていただいています。

今そういった学校支援、要は、学校協働本部ということで、学校支援地域本部事業をやっていくという話なんですけど、そのなかで佐川高校さんのご意見も聴いて、4町村でできることは何でも支援したい、というのが基本的スタンスでございます。

生徒数が減って、大変厳しい状況ではあるんですが、地域としては何とか、唯一の高等学校でございますので、この学校が地域の、まさにシンボルとして、今後とも地域の中心的役割を果たしていただける、そういった取組に対して十分支援をしていきたいと考えております。

簡単でございますが、以上でございます。どうかよろしく願いいたします。

田村教育長

どうもありがとうございました。それでは、委員の皆さんからご意見、ご質問がございましたらお願いします。

八田委員

いろんな説明をありがとうございました。

最初の方でおっしゃっていたこととしては、佐川町として、これから進めていきたいのは、特に一次産業をしっかり支援していくような、まちづくりをしていく。その核になってもらいたいという生徒像がありますよね。

でも、後半でおっしゃったように、大半の抜けていく生徒さんというのは、進学が3分の1と、工業系が3分の1となる。そうすると、やはり進学とか工業に向かっている生徒さんについては、市内に抜けるものは、もうやむを得なくて、佐川高校としてはやはり、地域を活性化していくような人材に集中した学校づくりの方が、教育内容としてはいいのかなというふうに感じたんですけど、そういう理解でよろしいですか。

佐川町 教育長	<p>いや。現在、確かに子どもたちは、進学を目指して、あるいは就職を目指して、佐川高校以外の学校へ通っているという実態がございます。</p> <p>それをなんとか食い止める方策の一つとして、一次産業に小学校段階から子どもたちの目を向けたい、そのためのふるさと教育をやっていききたい。少し壮大なことになるんですが。</p> <p>直ちに今取組んだから、それが即ということにはならないと思うんですが、町としては、まずそういった部分をしっかりやっていって、それを佐川高校にもつなげて、小・中・高とつなげる。ちょうど佐川高校は、「さくら咲くプロジェクト」で、地域学習をしっかりとやっていただいております。</p> <p>そういったなかで、小学校段階からそういうことを地道にやっていって、できれば地域に残る人材、佐川高校もそういった面に配慮をしていただいて、地域に残る人材を育てる。中央に流れておる、高知市内に流れておる生徒を、少しでもこちらへ引き止めたいという想いで、今後、来年度から特に、ふるさと教育に力を入れてやっていききたい、ということでございます。</p>
八田委員	<p>そうすると、例えば、進学の希望者であっても、佐川高校に残って進学の勉強ができたとしても、大学でまた出てしまう可能性が高いわけですよね。</p> <p>それでは、そのビジョンとしては、いったん出るけども、また佐川に戻ってくるような人材をという、そういう意図なんですか。</p>
佐川町 教育長	<p>ふるさと学習の想いというのは、一つはまず、地域を知ってもらい、そして、地域に誇りを、あるいは愛着を持ってもらう、そういうことが一つはあろうかと思っています。</p> <p>そういったなかで、当然、地域から出て行く子どももたくさんいると思っておりますが、地域から出て行っても、あるいはUターンで帰って来てもらうこと、あるいは外から佐川町を応援してもらえる、そういった子どもを一人でも多く育てたいということでございます。</p> <p>まず、第一段階としては、地域に残ってもらえる生徒を一人でも多く育てたい。しかし、現実問題としては、当然出て行きますので、そういったUターン、あるいは地域外から応援してくれる、そういった子どもを一人でも多く育てたいということでございます。</p>
八田委員	<p>だいぶ、分かりました。その場合、佐川高校の教育の中身に関しては、部活に関してはなかなか難しいところがあるんですけども、教育の中身に関して、今、例えば欠けている観点であるとか、コンテンツ、こういうところの教育をもう少し充実させてもらえれば良いという、何かそういうものは具体的にありますか。</p>
佐川町 教育長	<p>まだ、佐川高校さんと具体的に、そういった面で話はしておりませんが、一つはやはり、子どもたちが進学を目指して、進学拠点校といわれる高校、あるいは私学へ流れておる、この実態がございますので。</p> <p>それを食い止めるための、佐川高校は、先ほどデータで国公立大学への</p>

<p>八田委員</p>	<p>進学者数が、2人や1人であったというようなことですが、それを少しでも増やしていただいて、まずは子どもたちに、佐川高校へ行っても大丈夫だよという情報発信ができる、そういったことをやっていただきたい。そういうことが一つあるのかなと思います。</p>
<p>平田委員</p>	<p>分かりました。佐川は確かにJRで通うと、そんなに遠くはないんですが、でも、毎日それを続けると、明らかに、高知市内に住んで高知市内の高校に通える生徒に比べると、もう明らかに不利なんです。余分な時間をそんなところへ費やすぐらいなら、佐川高校でしっかり勉強した方がいいと思います。その辺はぜひ考えていただきたいです。ありがとうございます。</p> <p>川井教育長さん、どうも、お話を聴かせていただきまして、ありがとうございました。</p> <p>私、今回、5ブロックでの教育委員会協議会に参加させていただきまして、本当に私自身の勉強不足ということを痛切に感じております。</p> <p>東部地区へ行きますとも、中部地区へ行きますとも、また今回、高吾地区へ参加させていただきまして、実に県立学校が地域の様々な支えをいただいて、今日、学校運営へのご支援は大変、どこの地域もしてくださっているということを痛感しています。</p> <p>県立学校ですので、市町村立と違って、あまり大きな支援はないかなというふうに感じておりましたけれど、お話を聴きまして大変ありがたく思っております。それを私、第一に考えました。</p> <p>本日のお話も、大変緻密に検討されまして、練り上げられてのお話だったと思いますし、佐川町の子どもの出入りの数値的なものも、大変分析をしていただいております、よく私も分かりました。</p> <p>教育長さんから、佐川町の総合計画ですか、幸せなまちづくりというお話がございましたけど、私、佐川町っていいましたら、文化と教育のまちというようなキャッチフレーズを、よく耳にするように思いまして。それは大変教育についても大きい、まちづくりのフレーズだと思います。ぜひ、それを推し進めていただきたい。</p> <p>私は、教育でどうしても、中山間地域の多い高知県におきましては、ふるさと教育っていうんでしょうか、地域の未来学なんかを、小・中・高を通して勉強することが、やはり地域の活性化につながっていくのではないかと思います。</p> <p>それを抜きにして、地元へ定着して云々だという話には、ならないという考え方を持っております。一次産業にしる、郷土を愛する、地域を愛する、誇りを持たずという教育をしているということは、大変うれしかったと思っております。</p> <p>小・中・高生と教育長さんをはじめ、色々お話をもって、どうすれば佐川高校が活性化につながるかという一定の結論が、お話しがあったように思いました。</p> <p>やはり、卒業時点において、進学もピシッとできる、就職もできるという取組を、小中学生は望んでいるんだということですので、このお話は県立学校関係者も、もうすでに聞いていることだと思います。冒頭に言いま</p>

<p>竹島委員</p>	<p>したように、県立学校でございますけど、佐川町と一緒にあって、その地域の子どもが信頼できる、安心して通える学校づくりを、私たちも取り組まなければいけないと思います。</p> <p>ぜひお力添えをいただいて、すばらしい佐川高校にさせていただきたいというふうに思いました。そんな感想を持ちましたので、どうかよろしくお願いいたします。</p>
<p>佐川町 教育長</p>	<p>今日はありがとうございます。部活動をこれからもっと盛り上げたいということなんですけれども、佐川町は高知ファイティングドッグスの本拠地で、よく町長さんなんかも、色々活動をされていると思うんですけれども、やっぱり小学生、中学生、高校生は今野球とサッカーでしょうか。</p> <p>それをファイティングドッグスと結び付けながら、ソフトボールの強化指定にはなっていますけれども、野球っていうのは、今、室戸高校の女子野球とか禰原高校の男子野球、色々やっています、なかなか被る場面もあるかとは思いますが、せっかく我らのファイティングドッグスがあるので、そこら辺のことは、どういうふうに考えていらっしゃるのでしょうか。</p> <p>実は、佐川高校に「野球部をつくる会」というものも、かつて、もう4～5年ぐらい前でしょうか、できていました。当時の町長、あるいは私なんかも、そのメンバーへ入って、色々そういったことを町民みんなで盛り上げて、佐川高校に野球部をつくったらどうかというようなお話もあったんですが、現実問題として、この高吾地域の中で、佐川高校はソフトボールをずっと頑張っていて来られている。</p> <p>また、ソフトボールの盛んな地域ということもあって、ソフトボールと野球はなかなか、岡豊高校みたいな大きな学校であれば別でしょうけど、なかなか難しいのではないかとということで、佐川高校に野球部をつくるという活動は、そのうち下火になってきたというのが現実です。</p> <p>現在、少年野球なんかも、この前、新聞へ載っていましたが、なかなか人がいなくて大変だと聞いています。実は佐川町内でも、少年野球もありますし、中学校の野球部もあるんですが、なかなか少年野球も人数が減ってきている。一方、佐川はサッカーどころでして、Jリーガーも輩出しております。</p> <p>そういったなかで、今、小学校の少年サッカーチームに、100人ぐらいの子どもが参加している。その子たちが中学校へ行って、サッカー部へ入るということで、先ほど申しましたように、サッカー部が約40名おりますが、野球部はもう20名を切っております。つい最近、新チームになって、野球部はなんとか、9人揃えて活動できる状況にはあります。</p> <p>そういったなかで、確かにファイティングドッグスがあって、越知と佐川で一生懸命応援をしているんですけれども、野球は少し、佐川高校の現在のソフトボール部ということ念頭に置くと、少し難しいのかなということを今、私どもとしては考えております。</p> <p>町長が実は、学芸で全国優勝をしたメンバーの一人のようでして、町長は一生懸命、ソフトには力を入れておるんですけれども、残念ながらちょっと野球部は難しいのかなと。</p>

<p>木村委員</p>	<p>逆に、昨年の佐川中学校の野球部の一人が橋原高校に抜けたりと、そういう現実問題もございます。</p> <p>かつて佐川高校は、サッカー部がかなり強い時期もございました。そういったことを考えると、佐川の地域性を考えると、ソフトボールを一生懸命頑張っておる。そしてもう一つは、サッカー部をまた少し、テコ入れしていただいてというような思いが、私どもとしては持っておるというような状況です。</p> <p>2年か3年ほど前に、佐川の町長さんとお話する機会があって、都市部とは違う価値観で、佐川町独自の指標をもって、佐川に住む人たちの幸福度を上げていくんだという、お話をされておられました。もう本当に共感して、その時に意気投合したことでした。</p> <p>先ほど、佐川高校に望む姿というなかで、八田委員からもお話がありましたが、農業・林業といった一次産業に希望を持って、夢を抱くような、子どもたちを育てていきたいというお話があったり、まち・ひと・しごと、まさに社会に出てから、どれだけ役に立つ人間を育てるんだというような意味だというふうに、私は理解したんですが、それが必ずしも進学とリンクしなくてもいいんじゃないかと。</p> <p>佐川町の独自の指標といいますか、町としてどういうまちにしたいのか、どういう子どもたちを育てていきたいのかということ、むしろもっと大事にされている。</p> <p>最初のうちは確かに、進学が強い学校の方が、子どもたちに喜ばれるかも分かりませんが、長い目で見ると、子どもたちにとって本当に大事な教育ということが、もしかしたら、そこでできるのかもしれないんじゃないかなと、私は思ったりするので、ぜひ4町村ですかね、近辺も一緒にさせていただきたい。</p> <p>本当の意味で、世の中に出て役に立つ人間を、どうつくっていくんだということに、特化していただくというのが、特に中山間の学校の在り方じゃないかなというふうに、私は思うんですけども、その点はいかがでしょう。</p>
<p>佐川町 教育長</p>	<p>ちょうど、この総合計画をつくる時に、いわゆる幸福度をデータ的に出しています。それを見ますと、佐川町の幸福度は、全国トップの沖縄県が834らしいですが、第2位の鹿児島県が738、佐川町は737.6で全国的に見ると非常に高い。</p> <p>これは風土、いろんな要素が入っていますが、町長が言う、幸せなまちづくりというのは、幸福を実感できる、経済的な部分だけではなくて、地域の絆、つながり、そういったもので、人の幸福度数はずごく変わってくる。</p> <p>そこら辺を非常に大事にしたまちづくりをしたい。そういうことで、まちづくりも、いわゆる行政が一方的にするのではなくて、住民との協働というよりも、住民自ら自分事として、まちづくりをやっていただくと。住民主導のまちづくりをしようというのが基で、総合計画をやっております。</p> <p>佐川町、人口13,000人ぐらいの所なんですけど、産業として確かに見ていくと、司牡丹という企業があるんですけど、近年なかなか厳しい。</p>

<p>田村教育長</p> <p>各委員</p>	<p>そういったなかで今、特に力を入れているのは、自伐型林業や農業です。とにかくそういった一次産業を、今まで子どもたちが、どちらかといえば見向きもしなかった部類、そこでしっかりと生業としてやれている部分が、全国的にたくさんございます。</p> <p>そういったものを子どもたちに、小学校段階からしっかりデータで示し、また実際、そういった現場に子どもたちも連れて行って、農業・林業、そういったものが、君たちの将来の職業として、選択可能な範囲内の位置付けに持っていきたい。小学校段階からふるさと教育に力を入れるというのは、そこです。</p> <p>佐川町には今、確かに様々な学校教育の課題がございます。それから不登校の改善もやらなければなりません。</p> <p>そういったなかで、町長から来年度、教育研究所を設立していただける了承をいただいたのは、町長の想いとしては、ふるさと教育をしっかりとやりたい。そのためには、外部の力も入れた、ふるさと教育にも取組みたい。教育関係者だけでつくる、ふるさと教育の体系化ではなくて、民間の様々な視点、そういった人たちの考え、想い、そういったものを取り入れた、ふるさと教育のしっかりとした体系的なものをつくっていききたい。ということで、教育研究所を立ち上げてやりましょうということになっています。</p> <p>その全ての元に行き着くのは、やはり佐川で育った子どもたちが、とにかく地域を知って、地域に愛着と誇りを持って、将来、佐川町のために何らかの役割を果たしてもらえる。そういった者を一人でも多く、地域の応援団をつくっていくんだと、それが全て背景にございます。</p> <p>今後、私どもは、学力向上はもちろん、不登校対策もしっかりやっていかなければなりません。町の大きな柱として、子どもたちに、そういったふるさとをしっかりと認識してもらい、それを今後やっていきたい。</p> <p>それが、佐川の幸福度を上げることにもつながるということではないかなと、いうふうには思っています。十分な答えにならなくてすみません。</p> <p>それでは大体、ご意見、ご質問が出たようでございます。だいぶ時間も経ちましたので、とりあえず、こういうところでよろしいですかね。</p> <p>構いません。</p>
-------------------------	---

イ 四万十町

<p>田村教育長</p> <p>四万十町副町長</p>	<p>それでは、引き続きまして、四万十町の森副町長さんの方から、ご発言をお願いしたいと思います。</p> <p>四万十町の副町長の森と申します。本来なら、中尾町長が説明をするところではありますが、ちょうど今日、土佐くろしお鉄道の新陳情がありまして、JR四国、高松の方に出張をしておりますので、私の方から、自治体からの意見ということで、意見を述べさせていただきたいと思っております。</p> <p>先ほど、佐川町の方からもありましたけども、本町も町の「総合振興計画」として平成29年度から10年間の振興計画を策定し、今2年目に入っているところであります。</p>
-----------------------------	--

この振興計画におきましては、キャッチフレーズとしまして、「山・川・海 自然が人が元気です 四万十町」、このことをまちの将来像としまして、3つの目標を掲げております。

一つには、挑戦し続ける産業づくり、生涯元気で郷土愛に満ちた人づくり、日本が誇る四万十川流域の環境づくりに取り組み、魅力ある持続可能なまちづくりを進めているところであります。

こういった取組によりまして、平成28年は合併後、初めて転入・転出が逆転をしまして、15人の社会増を記録しております。

そういった社会増ということもありますけども、少子高齢化ということでは、本町も避けて通れない状況にあるわけでありまして。

こういったなかで、今後の地域を支え、発展させていく、意欲ある人材の確保と育成を最重要課題として、移住定住政策とも連動をした取組を進めているところであります。産業振興と生活環境の充実と並行をした、教育の魅力づくりこそが、子育て世代や若者の定着には、不可欠であるというふうに考えております。

また、生まれ育った環境により教育の格差があるとすれば、それは個人では解決できないものであり、本人のやる気と努力が報われる地域社会でなければならないというふうに考えております。

地域の教育力は、移住定住にも非常に大きな影響力を持ち、幼保・小・中・高が連携をし、誰もが学べる魅力ある教育環境づくりを進めることで、優しい教育のまちとしてのブランド化を目指しているところであります。

このためにも、県立高校の存在というのは非常に大きな意義と影響力があり、将来の進路や生き方に影響を与える、多感な高校生が、生まれ育ったこの四万十町で学ぶこと自体に、非常に大きな意味があるというふうに考えております。

入学者の減少が続いている現状ではありますけども、高校の教育活動は、地域の活力そのものであるというふうに考えておりまして、高校の存続は、四万十町の将来の課題としても捉えているところであります。

四万十町は、高校に時代を支える人材の育成を求め、反面、地元の高校は、町に地域資源の提供を求め、本町が目指す、先ほど申し上げました将来像の実現に向けて、ともに歩む地域の高校づくりを応援をしているところであります。

ご承知のように、四万十町は林業・農業を主体とした、一次産業の町であります。

実は、今日時間がありましたので、少し色々と調べてみたんですけども、役場はもちろんのこと、町内のいろんな事業所に、四万十高校、窪川高校の出身者が、中心的な位置を占めて活躍をしております。

役場の本庁であれば、管理職の半分以上が窪川高校出身でありますし、本町の場合、総合支所があります。大正地域振興局、十和地域振興局、それぞれあるんですけども、こちらも四万十高校の、地元高校の出身者が、職員の半分以上を占めておりますし、なかでも保育所ですけども、大正・十和の保育所4園あるんですが、18人中13名が、地元の四万十高校出身の保育士が、子どもたちの指導もしているところであります。

それから、2点目ではありますが、県立学校に対して望む学校像、育ててほしい生徒像ということで、考え方を申し上げたいと思います。

四万十高校、窪川高校には、特色ある少人数教育の活動を通しまして、地域の活性化にも寄与できる、地域に愛される、また期待をされる学校づくりを進めていただきたいというふうに考えております。

そのためには、生徒が思い出をたくさん残せ、チャレンジできる場をたくさん与えられる環境のもと、地域住民との学びの場の接続を図り、生徒のみならず地域全体が自慢できる、地元の高校であっていただきたいというふうに思います。

また、地元高校で学ぶ生徒については、地域の特性や可能性を知り、自らの可能性を信じ、自らの意志で志を持って、より良い社会を形成するために行動できる、そういった生徒に育てていただきたいというふうに思います。

つまり地域、この四万十町に誇りを想い、郷土愛を育み、将来の自分をしっかりと見つめ、自分で選択できる意志、そういった自立心を持った生徒を、ぜひ高校には育てていただきたいと考えているところであります。

このためにも、地域と行政の協働のもと、四万十町も様々な応援を始めているところでありまして、高校本来の魅力アップから、町全体のふるさと環境の充実に、つなげていきたいというふうに考えております。

3点目の自治体のこれまでの支援内容、新たな支援施策等について、意見を申し上げたいと思います。

本町では、今後のまちづくりを進めるに当たり、その基盤となる人づくりというのを、中尾町長は大変重要視しておりまして、人材育成の教育現場である、町内高校の持続可能な魅力づくりを、「四万十町高校応援大作戦」と銘打って、各種の支援策を講じております。

こちらについては、先ほどの資料の中にも一部掲載をされておりましたが、その目標としましては、「生徒一人ひとりの夢・志を実現できる教育環境づくり」、「四万十町の次代を担う人材育成」、「持続可能な魅力ある学校づくり」というふうに、目標を掲げております。

通学支援や部活動、校外研修の移動経費、四万十高校には寮があるわけですが、寮の運営費の一部補助など、保護者の負担軽減などを、学校の外から支援するなか、昨年11月に放課後の学びの場として、町営塾「じゅうく。」を開塾をしたところであります。

中山間、少人数、町営だからこそ可能であり、際立つ塾を目標としまして、学ぶ意欲・学ぶ力・学んだ力の3つを柱に、都会の若者を講師として招きまして、交流機会の創出、学びの質を確保しながら、誰にも学びを保証する機会を提供をしているところであります。

生徒たちの第3の居場所として、安心して学べ、今の自分をさらに磨き上げたいと、意欲ある生徒が集まっているところであります。

また、校長先生ならびに先生方のご理解とご協力も得まして、補習や総合的な学習の時間への支援、大学のキャンパスツアー、そういったことも実施をさせていただき、取組が徐々に学校内部にも浸透し、高校と町営塾との信頼の向上、そういったものにもつながりつつあるというふうにも感じているところであります。

また、学校での地域学習はもちろんのこと、町営塾での課外授業を通じまして、地域固有のことを学ぶことで、ふるさとに自分自身の居場所と出番を見つけ、進路意識にも影響があり、キャリア教育の推進にも寄与でき

	<p>ているというふうに、期待もしているところであります。</p> <p>学力向上支援だけではなく、必要な時期に必要な理解力・判断力・表現力が発揮できる基礎づくり、そのきっかけを提供していければというふうにも考えているところであります。</p> <p>来年度、これまでの取組をより効率的、かつ効果的に推進をするため、高校内部への支援策を充実していきたいというふうに考えております。</p> <p>その一つとしまして、高校魅力化コーディネーターという位置付けで、窪川高校へ職員を1名、嘱託職員という形になるでしょうか、少しまた調整をしなければなりませんけども、そういったことも考えております。また、高校生の海外研修ということで、8月に2週間ほど、高校生をカナダの方に留学させる、短期留学ということになるでしょうか、そういった取組もしていきたいと思っております。</p> <p>冒頭申し上げました、どうしても四万十町、広い町域を有しております。現在、通学助成ということで、町内の保護者には上限3,000円の負担で、交通費の助成をしておりますけども、来年度は町外の生徒にも、拡充をしたいというふうに考えているところであります。</p> <p>こういった高校応援大作戦という、新たな財政出動が発生をしております。平成29年度で約4千8百万円という、大変大きな予算となっているところであります。これは何よりも、地元の高校への地元中学からの進学率を高めたい、そういった思いでの取組であります。</p> <p>最後になりますが、上記以外のことになりますが、県内の中山間地域の公立高校では、少子化の進展により大きな定員割れが続いておりますが、公共交通インフラが進んでいない過疎地域では、保護者負担も年々増加傾向にあります。</p> <p>先ほど言いましたように、本町でも、地元高校に通う生徒の時間的、経済的な負担軽減をはじめ、高校と地域とのさらなる連携を深め、持続可能な町づくりと、魅力ある高校づくりを一体的に進めております。</p> <p>育つ環境で教育格差が生じないように。また、知識を問う学力ではなく、個々の能力が伸ばせ、将来、社会で活躍するために必要な力を育むことができる、中山間地域の学びの場の確保をお願いしつつ、県全体のより良い再編振興計画、「後期実施計画」になることを望んでいるところであります。</p> <p>以上4項目について、要点での発言ということになりますが、よろしくお願ひします。</p>
田村教育長	ありがとうございました。教育長さんはよろしいですか。
四万十町教育長	はい。
田村教育長	それでは、委員の皆さん、どうぞ。
竹島委員	今日はありがとうございます。ここへ来る前に、四万十高校と窪川高校の学校見学をさせてもらったんですけども、立派な寮があったんですね。今、副町長さんがおっしゃった、寮の方の補助もされていると聞きました。寮の金額について教えていただけますか。あと、やはりこの人数を見

<p>四万十町 副町長</p>	<p>て、中学校からの連携という意味で、なかなか地元の中学生が、四万十高校、窪川高校へ来ていない。パーセンテージが少ないということなんですけれども、今いろんな説明を受けまして、地域でいろんな行事を一緒に行うとか、保幼・小・中へのPR活動について、もう少し具体的に教えていただきたいんですけれども。</p> <p>前段の「木の香寮」になりますけど、こちらの補助ですが、入寮者に対して朝食の提供などをするための調理師さん、そういった部分の人件費の補助をしております。</p> <p>詳しい金額というのは、手元に資料がないので詳しくは申し上げられませんが、寮についてはそういったことがあります。教育振興会が両校にありますので、教育振興会を通じまして、遠征費の補助であるとか、そういった部分の補助もしているところでもあります。</p> <p>後段については、教育長の方からお答えをいたします。</p>
<p>四万十町 教育長</p>	<p>四万十町教育長の川上と申します。どうぞよろしく申し上げます。</p> <p>中学校からの連携ということでございますが、地元の中学校から、地元高校の方への進学というところについては、佐川町さんの方からも、そういった部分も当然説明もあったわけでございますけれども、われわれも実際のところは、5割6割といったところを目指していきたいわけでございます。けれど、現状、3割を少し切っておるところが実態、実状でございます。</p> <p>そういったなかで、地域で一緒に行事などをしていないかということでございまして、このことについては、色々地元の行事も当然ございまして、まずはやはり、小・中・高というところの連携も、非常に大事ではなかろうかというところですよ。</p> <p>窪川高校においては、小学校の時からお茶摘みの体験であるとか、小学生を招いて、今年から始まったわけでございますが、化学実験であるとか、そういったことなども行っています。まずは、非常に食いつきがいいといえますか、非常に子どもたちの関心のあるところ、小さいところから、窪川高校の方は、そういったつながりを持っておるといような状況でございます。</p> <p>また、四万十高校においては、非常に部活動が盛んな地域でもございます。ソフトボールが、これは小学校の段階からそうですが、中学校の方においても、小学校・中学校でも全国大会の方に参加をしたり、また中学校の方では、過去には優勝というような経験をしたことも、本当に最近でございますが、ございます。そういったような、ソフトボールなどを含めての連携なども考えられます。</p> <p>また、最近、新聞の方にも出ておりましたが、ジャズ、大正中学校の方は音楽部がございまして、そういうジャズという分野で、非常に地域の方々の関心を集めております。</p> <p>地域の方の力もお借りして、そういった音楽について、連携を図っていいんじゃないかということで、まず四万十高校の方では、これは一部の小学校なんですけど、金管バンドというバンドもございまして。そういうふうな取組をしております。金管の楽器ですね、それを用いた演奏。これはもう、</p>

	<p>公的な行事なんかに出させていただいて、大きなところでいうと、四万十川のウルトラマラソン大会がありますが、その60kmの部で、演奏をしていただいております。</p> <p>そういった小学校の方、それと、中学校の方はジャズで地域とつながりを持っていただいております。去年、楽器の新調もいたしまして、それと合わせて、自衛隊の方からも指導に来ていただいて、一緒に、そういった楽器のリニューアルというところで、また皆さんにご披露させていただきました。</p> <p>その時は、窪川中学校の方の吹奏楽部も一緒に参加して、四万十会館、これは非常に大きな会館で、500人が収容できるわけですが、それが超満員ということで、非常に関心の高さというところを感じたわけでございます。</p> <p>そういったような、地域の中において、やはり音楽への関心もございませし、地域の方の力を借りて、音楽活動も盛んに行っております。</p> <p>それをもって四万十高校の方へは、ぜひ、音楽の方で連携を図れないだろうかということで、現在、四万十高校にいる生徒さんが、大正中学校へ来て一緒に活動をしたり、逆に、音楽を通じて四万十高校へ行ってみたいという気持ちも、現在生徒の中で芽生えております。</p> <p>そういったような活動を、また地域の応援もいただいて、部活動という分野で行っております。また窪川高校も同様でございます。そういった子どもたちが小学生からのつながりを持って活動しております。</p>
木村委員	<p>高校応援大作戦という、多額の予算まで組んでいただいて、本当にありがたい限りでございます。</p> <p>そのなかで、いくつか教えていただきたいんですが、町営塾、これは放課後の学力の補助というような形でやられてるといような、ご説明を先ほどいただきましたけども、窪川高校と四万十高校って、今日も行ってみたら結構離れています。</p> <p>そこで、各々の地域でその塾が開かれているのかどうかということと、できうれば、学力向上のための塾だけではなくて、昔、長州藩にあったような、人の道というか、窪川の良さ、ふるさと教育といいますか、大人が子どもに伝えたいことといいますか、そういったことも含めた、四万十町独自の塾の在り方というものも、ぜひ今後検討していただいたらどうかというのが1点です。</p> <p>それともう1点、今日窪川高校へ行って、校長先生にお話を聞いた時に、人材育成委員会というのが、官民で立ち上がったというふうなお話を、校長先生がされていたというふうに思うんですが、もし人材育成委員会というものが、どういう形で、どんな活動をされているのか、分かりましたらお教えいただきたいと思っております。</p>
四万十町副町長	<p>まず町営塾ですが、木村委員のご指摘のあったように、2会場で行っております。四万十高校所管では、大正地域振興局という総合支所がありますので、そこを一つ。それから、窪川高校管内では、この農村環境改善センターを拠点として、それぞれ週3回実施をしているところです。</p> <p>それから当然、学力向上以外の取組ということで、去年、「じゆうく。」</p>

<p>四万十町 教育長</p>	<p>が発足をして、ちょうど1周年の記念行事がありまして、私もその式典に参加をして、そのなかで、探究学習ということでプロパガンダの取組について、講師の先生が子どもたちに指導をしていました。</p> <p>全くこう、視点を変えた取組というの、「じゆうく。」のなかで取組もしておりますので、やはり人づくりであるとか、先ほど冒頭に申し上げましたように、自立心を養う気持ちとか、そういった視点での取組も、これから期待もしているところでもあります。3点目は教育長の方から説明させていただきます。</p> <p>人材育成の委員会ということでございます。これは、やはり地域の方々に集まっていただいて、今のそういった高校の在り方もそうですが、やはり人材育成という観点から、どういう形で人づくりをしていくのか、それへ高校をどう絡めていくか、そういったところを、協議をして話をしておるといようなことでもございまして、当然、構成メンバーは、高校の校長先生も入っておりますけれども、地域の方々も入っていただいておりますのでございます。</p> <p>人づくり委員会というところで、人材育成ということですが。いずれにしても、人材育成を図るためにそれぞれ、今の四万十町における、やはり課題も当然ございますし、その課題をどう克服して、あるいはどういう施策を打っていくか、そういったことなども話し合いをしておるといようなことになってございます。</p>
<p>四万十町 副町長</p>	<p>少し補足させてもらいます。その人づくり委員会ですけど、中尾町長が、公約として四万十塾であるとか、それから産業振興塾とか、そういった、世代によって幅広い課題を解決するための塾という位置付けのなかで、産業振興の在り方であるとか、小学生・中学生・高校生、こういったところは、将来の四万十町を担うために、教育長が言われた、ふるさと教育の視点で、生涯学習の延長になるかと思っておりますけれども、そういった部分での取組を、この人づくり委員会の中で一定協議もしながら、計画的に進めているということでもあります。</p>
<p>平田委員</p>	<p>先ほどは本当に、副町長さんはじめ、教育長さんから色々なお話を聞かせていただきまして、ありがとうございました。</p> <p>この地域の佐川町の教育長さんと同じように、本当に四万十町の県立2校も、この地域で大変な支援をいただいているというふうに思いました。</p> <p>たくさんございまして、繰り返しませんけど、ぜひ、この地域の子どもたちのためにできる支援を、四万十町として一層お願いをしたいというふうに思いました。</p> <p>私、前職は教員職でして、この四万十町に2つの県立高校があるわけでもございますけど、仮に、私がこの学校どちらかを預かった時に、どうしたらいいのかなということ、この2校では常に思います。お2人の校長さんも、今日のお話を聞かせていただきまして、生徒数確保に向けては、大変頭を悩ましておられると思います。</p> <p>そのために今、町として、教育行政として、何ができるかということで、本当に真剣に、子どもたちのために取り組んでいただけるということに感</p>

<p>四万十町 教育長</p>	<p>謝をしながら、聞かせていただきました。</p> <p>私の気持ち、またご質問でお聞きをしたいんですけど、率直に今2つの県立学校が、生徒数確保で悩んでいるっていうのは、もう現実にあると思います。どうすれば一定の生徒数が確保できるのかという、町から見て、お考えをお話をさせていただきたいなという思いをします。</p> <p>町としての支援はもう、たくさんありまして、それも重複すると思いますが、お許しをいただきたいというふうに思います。</p> <p>教育長さんから、先ほど地元の中学校から地元の高校へは3割程度だと。それを5割程度にしたいというお話もあったと思います。そうなれば、この2校は、生徒数確保の見込みはつくと思いますね。</p> <p>ぜひ高等学校が、十分教育内容を地域の保護者や中学生に説明をして、地域の子どもは地域で、小・中・高で学べる、学ぶという、四万十町の学校はそうなっているという学校をつくっていただきたいと思います。</p> <p>具体的に、どういうふうに両校が改革していけば、そういうふうになるのか、率直なご意見を聞かせていただきたいなということでございます。</p> <p>ぜひ2校、大変悩んでいると思いますので、今まで以上に、いろんな支援をお願いしたいというのが、私の質問の趣旨ではあります。どうかよろしく願いいたします。</p> <p>ありがとうございます。本当に町内2校ということになるわけでございますけれども、昔でいいますと、高岡郡の中で窪川高校、また幡多の方での四万十高校というような位置付けであったと思います。</p> <p>そういったなかで、本当に地域の子どもたちは、地域でしっかりと育てていきたいというところは、これは本当に思うところでございます。これは、佐川町の川井教育長の方からもございましたけれども、小中高と連携、系統性を持って子どもたちを育てていくということは、非常に大事なことであろうかと思えます。</p> <p>そういったなかで、やはり就学前においても、就学前から継続した教育、取組というところも考えていきたいと思っております、副町長の方からも、先ほど説明があったところでございます。</p> <p>私たちも現在は、小学校は小学校、小小の連携、それと小中の連携というところをもって、しっかりとふるさと教育、これは佐川町の川井教育長も申しておりましたが、わが四万十町でも、ふるさとを愛し、志を持ち、地域に貢献できる子どもを育てたいと思います。やはり社会に貢献できるということにもなろうかと思えます。</p> <p>そういった子どもを育てたいということで思っております、これはやはり大事なところは、小学校から中学校へつなぐというところも大事ではございますけれども、やはり、しっかり高校へつないでいく。</p> <p>思い切って、先ほどのどういった支援をしておるかというところは、割愛させていただきますが、「じゆうく。」とかも含めて、色々な支援をしております。通学の助成もしておるわけでございますし、塾の「じゆうく。」ということもございます。</p> <p>そういったような取組をもって、しっかりとこの四万十で、四万十町の中で子どもたちを応援して送り出す。ブーメランのようにしっかりと送り出して、やがてその子どもたちが四万十町に帰って来る。あるいは、他の</p>
---------------------	---

地域ということになる可能性も当然ありますけれども、そういったところにおいても、地元で貢献ができる、やはり遠くからでも応援ができる、そういったところを育てていきたいということで、今、施策も打っております。

ふるさとを愛し、志を持ち、地域に貢献できる、そういった子どもたちを育てていくというところを目標に、取組の方を考えておるわけでございます。

そういったなかで、それぞれが特色のある、子どもたちがやはり行ってみたい、保護者も行かせたいという学校であるために、四万十高校、そして窪川高校も、様々な取組の方もしておるわけでございます。先ほどの資料の中にも、7ページにございますように、窪川高校、四万十高校、それぞれの取組をしております。

行政においても、生徒たちと意見交換をしながら、町長や私も入っておりますが、行政関係者との意見交換を行いながら、今の子どもたちがどのように高校を考えておるか、あるいは地域を考えておるか。これは窪川高校も四万十高校も同じでございます。

そういったような、直に町の行政を担うトップである町長、そして教育行政では、また私の方が参加をいたしておりますが、そういったような意見交換など、あるいはシンポジウム、「夢・志」シンポジウム、これは2月に窪川高校の方でも行うようになっております。そういったような取組なども行うような形にしております。

そういったなかで、やはり取組、これは部活動というところもあろうかと思えます。それと、進路・進学保障というところも当然あろうかと思えます。けれども、やはりこれは中央部といいますか、高知市方面の学校にはない、地域における子どもたちが、しっかりとふるさとに応援・支援をしてもらったと感じてもらう。その支援をしてもらおうということの背景には、金銭的な部分だけではなく、地域の方々に、ふるさとを想う気持ちを育てていただきたい。

これは学校支援地域本部とか、コミュニティ・スクールというものもございまして、そういったものの立ち上げを、現在しております。なお、しておると言うよりも、学校支援地域本部の方は、小学校においては、ほとんどそういった本部事業を取り入れるということになっております。また、中学校も2校、四万十町だけで5校ありますけれども、2校において、そういった形も取り組んでいこうじゃないかと考えております。

しっかりと地域の力を借りて、これは小学校・中学校、そして高校、今、窪川高校は学校支援地域本部ということで、地域の力を借りて、そういったような取組をしておるわけでございます。

いずれにしても、町の支援等を含めて地域の力も借りて、そしてこの四万十町で、しっかりと送り出しができる。そういったような取組、先ほど言いましたように、ブーメランのように、とにかく思い切り送り出す支援というものを、地域も含めて取り組みをしておる。

また、今から先も新たに、副長町の方から、海外における研修とかいうことも出ておりましたが、いろんなそういった施策、仕組みというところも、また考えておるわけでございます。

四万十町副町長	<p>平田先生から貴重なご意見をいただきまして、ぜひ町としては、連携中学、これからも 35 人、平成 31 年度には 43 人という生徒がおります。こういったところで、しっかりと 50%以上の地元からの入学者、そういったことを確保もしていきたいと思ひますし、なんと申しても、先ほど申し上げました「じゆうく。」、特色ある取組もからめながら、20 人を超える入学者を、町もしっかりと支援をしていきたいと思ひます。</p> <p>ぜひ委員の皆さんに、ご理解いただきたいのは、特に四万十高校であります。大正地域・十和地域というのは、田野々という町と、昭和・十川という国道沿いの町がありますけども、さらに山間地域に、30 分、40 分、時間のかかる集落が多数あります。</p> <p>そういった所から高校に進学もして来ますので、時間的な通学の 30 分どころではない地域もあります。四万十高校に通う場合においてもです。そういった、中山間地域の険しい条件にあるということも、ご理解いただきたいと思ひます。</p> <p>こちら冒頭申し上げましたように、やはり地域の保護者の方の経済的な負担、そういったこともあります。</p> <p>さらには、本当に両高校とも町内の事業所はもちろんのこと、各方面で活躍されている方が多数いらっしゃいますので、そうした人材を供給していく地元高校という位置付けが、これまでもありましたし、これからもそういった位置付けのもとに、高校というのは存続しなければならないというふうに、われわれ考えておりますので、どうかご理解をお願いしたいというふうに思ひます。</p>
平田委員	<p>本当に心強いお話を聞かせていただきまして、どうもありがとうございました。</p> <p>私も、ここにも資料をいただいておりますが、昨年 12 月だったんでしょうか、窪川高校生が、高校生地域創造サミットへ参加したと。高校生が地域の活性化策を出したということ。</p> <p>それはやはり、学校もそうでございますけど、町村、町がまた、いろんな話し合いを持って、学校の活性化もお話をいただいているから、高校生も、地域の活性化は私はこう考えるという案で、お話をさせていただいたというふうに思ひます。</p> <p>この中を見ましたら、町営塾などを紹介と書いていますし、農業体験ツアーなども話し合ったとあります。</p> <p>この若い大変柔軟な発想のなかで、全国大会へ行って、高知とは違った視点で、地域の活性化、またわが母校の活性化を考えてるところへ、窪川高校生が行ったということは大変素晴らしいと思ひますし、このことも併せて、また町として応援をしていただければというふうに思ひました。ありがとうございました。</p>
八田委員	<p>どうも今日はありがとうございました。</p> <p>ほとんどいろんな議論は経たんですけれども、窪川高校も四万十高校も、今日の資料を見ていただくと、資料 7 にこれから推測される中学校の卒業生数、非常に厳しい数字が今出ていて、それで、どちらもその再編振興のなかでは、最低規模が 1 学年 20 人以上ということ、なんとかクリアしな</p>

くてはいけない数字なんです。

在り方として、例えば窪川高校っていうのが、どちらかというとし街地の中心にあるということからすると、できれば2クラスぐらい確保したいなど。というのは、高知市内に抜けて行って、そこで進学のために勉強をするっていう、その一番大きな違いは、非常に多くの生徒が切磋琢磨するという環境です。教育をするコンテンツそのものは、いろんな方法で窪川にいても受けることはできるんだけど、周りで一緒に競争して勉強するという環境は、確かに高知市にはある。

でも、窪川から高知に通ったら、もう全く本当に時間の無駄で、そんなことをするぐらいだったら、もっとオリジナルな、いろんなことの時間に、子どもたちには使ってもらいたいです。

ぜひ窪川で切磋琢磨して勉強する環境を考えると、なんとかやはり、ギリギリ2クラス40人を超えるぐらいの人数を確保したいな、という感じでみると、確かに今日のこの資料7でいうと、あと数年で80人から70人台に中学校の卒業生数になってくるので、50%以上をクリアしていただくっていう目標は、非常に重要で、引き続きぜひ応援していただきたいんです。

逆に今、高知市内なり、ほかに進学している生徒さんに対する何か分析とか、どういう状況で四万十町以外に行っているのか、それに対してどんな応援をしてあげると窪川高校に残ってもらえるのか、その辺りに、ひょっと何かご提案とか、こういう方向に持っていきたいとかいうことが、もしあればお聞きしたいんですけど、いかがでしょう。

四万十町
教育長

今現在、応援の方は後の方でということで、先に、地元中学校から地元高校ではなくて、他の地域の高校に進学する、そういった理由の中においては、これは四万十町だけに限ったことではないかもしれませんが、新たな環境を求めて、他の高等学校を希望するという生徒がおります。

四万十町の中だけではなく、他の地域へも、また他の市町村へも行ってみたいというような生徒さんもおります。

また別に、やはり、専門的な知識とか技術を身に付けたい。やはり、地元でそういったような専門的な分野、農業分野であるとか工業分野であるとか、それから福祉分野であるとか、色々ございますけれども、そういったような技術を身に付けたい、そういった方々が、やはり四万十町外を希望するというようなことでございます。

それと、これは限られたことになるかもしれませんが、やはり国公立大学への進学を希望する生徒について、これは地元高校でも、そういった狙いというところを目指して、現在、取組の方も行ってきておるわけでございますけれども、やはり従来の高知市内の方へ向けて出て行くというようなことがあります。

それと窪川地域ですが、窪川と大正・十和と合併前はありましたけれども、窪川地域については、比較的交通の便がいいということもございまして、そういう交通機関をまた利用して、先ほど言った他の地域の高等学校を希望するというようなことで、進学をされるという生徒がおられるわけでございます。

結局3割を少し切るぐらいの、地元中学校から地元高校へと申しましたが、逆に言うと、7割ぐらいがやはり、そういった形で町外に流れておる

	<p>というような状況になるわけでございます。</p> <p>そういったことのなかで、どんな応援ができるかというところについては、今、地元高校の方で通学支援ということを行っております。上限は3,000円ということで、副町長の方からも話がありましたけれども。</p> <p>お金が6,000円と、通学の費用、公共交通機関を使って、JRであるとかバスであるとか、そういった乗り物を使って通学をしておると。町内の場合では、例えば6,000円であっても、半額の助成をしようじゃないかということで、その場合は3,000円ということになりますが、6,000円を超えても、もう3,000円を上限ということにしています。</p> <p>これはまだ、今から先の取組の一つとして、四万十町内の高校に進学をされる生徒のために、上限3,000円というところは、現在、まだ検討もしておりますけれども、やはり助成をしようじゃないかと。例えば上限を5,000円にするとかというような形で、その辺りは、お金が結構、町外から来ると5,000円以上は当然要ろうかと思えます。</p> <p>そういったところの通学の助成というところも図って、経済的負担について、四万十町内もそうですが、四万十町外から四万十町に進学をされる生徒の皆様方にも、通学の助成というところも考えていきたいなと思えます。</p> <p>それと、もう一つは「じゆうく。」という、そういった取組も当然ございます。それは継続ということになりますが、そういったなかで、やはり独自の、なかなかどういったところが高校生に魅力があるか、あるいは四万十高校、窪川高校に行けたからこそ、こういうような形も取れるんじゃないか、また応援してもらえるんじゃないかというところについては、先ほども話が出ておった、海外研修なんかも、非常に魅力的なところではないかなということで思っております。</p>
八田委員	<p>今日、何度もご紹介いただいた「じゆうく。」のところですか。「じゆうく。」は、四万十町内の高校に通う生徒だけに限定なんですか。それか、ひよっとすると、高知市内に通学しているけれども、帰って来て「じゆうく。」に行くというのは可能なんですか。</p>
四万十町教育長	<p>現在のところ、地元高校ということでして、地元高校の応援大作戦ということで、窪川高校、四万十高校生に限ってということになっておるわけでございます。</p>
八田委員	<p>場合によっては、高知市内に通っている生徒と一緒に勉強すると、かえって、窪川高校の魅力がアップするかもしれないなという気もします。無駄な時間を使わずに、ここで勉強できるんだってことが、むしろ周知されるような気もする。</p> <p>あと、四万十高校の方はもっと数字が厳しくて、あと何年かすると、もう中学校全体で、卒業生が20人ちょっとしかいなくなってしまうという状況があって、そうなると、地元からの定着率だけでは、もうかなり難しいのかなと。</p> <p>外部からも来てもらう必要がどうしても出てくるし、それで、従来は自然環境コースっていうのは一つの看板で、四万十の自然環境っていう魅力</p>

<p>四万十町 教育長</p>	<p>があったんですけども、今となつては、少しもう、こういう見せ方はインパクトがないのかなという気がします。</p> <p>それで、実際の今の教育のなかでは、例えば森林組合と連携して、地元での就職のモチベーションを高めるようなこともされているので、そうすると十和とか大正の地域っていうのが、これからどんな生活っていうか、社会をつくっていくのか、そこで必要な人材っていうのはどんな人材が求められているのか。そういうものと少し連携したような、独自の教育を四万十高校は、考えていかなきゃいけないのかなという気がしているんですけども。</p> <p>町の方として、高校に期待する、こんな人たちを育ててほしいというようなことが、もしあれば伺いたいと思います。</p> <p>人材育成というところにも入ってこようかと思いますが、一つは、四万十高校の方において、色々教育振興会の方とかOBの方々と一緒に、協議するような場もあったわけでございます。当然、高校も入っております。</p> <p>そういったなかで、やはり四万十町は、農業そして林業が、非常に盛んな所でございますので、窪川高校はコースで農業の方がございますけれども、四万十高校の方にも、ぜひにそういった林業、あるいは海洋堂ホビー館もございますので、造形の方のそういった専門分野を含めて、考えてみたらどうかというような声もございました。</p> <p>ただ、林業の方に関しては、林業学校というような所ができて、ただ、そうかと言って、近くでやはりそういった学科といいますか、コースといいますか、あれば非常に魅力的なところではないだろうかということも、話し合いもしたところでございます。</p> <p>今の現状でいきますと、やはり自然環境コースです。これは全国的にも、非常に魅了ある取組をしているコースでございます。そういった取組を、発信自体はしておりますけれども、やはり発信をしていくと同時に、四万十町の方へ来る、遠くから来る、町外から来るということになると、寮がないと当然いけません。</p> <p>その点、四万十高校は寮がございます。そういった、寮に対して、助成の在り方ですね。そういったところも含めて、また、受け入れ体制というところを考えていかなければいけないかなと考えております。</p> <p>それと併せてもう一つは、人材育成の部分は少し置いて、やはり、クラブ活動ということになります。部活ですね、始めのところでも、少しご説明もさせていただきました。</p> <p>現在、監督をしておる方が非常に著名な方で、高知県においても、ソフトボールに精通された方が、非常勤講師として来ていただいております。学校の方の課外もでございますけれども、部活動とか寮の舎監という形でも対応していただいております。</p> <p>そういった著名な方が来てくれておるなかで、いろんな子どもたちを呼んで、ソフトボール教室ということで、子どもたちのレベルアップというところも、図っていらっしゃるところでございます。</p> <p>やはり、非常に人気もございまして、これは四万十高校に関わるところの中学校区だけではなくに、窪川地域の方においても、非常にソフトボールが人気で、大正の方でも盛んに今、指導の面もされておるということで、</p>
---------------------	---

	<p>関心も非常に持っておられるようなことをごさいます、一つは、そういった部活動への取組もあるわけをごさいます。</p> <p>それと、音楽活動ということもごさいます。先ほどお話もさせていただいたところをごさいます、とにかく地域を、本当にふるさとを想う子どもたちを育てていくためには、やはり、それぐらいしっかりとした支援・応援も、われわれはしなければいけない。</p> <p>それに加えて、やはりこれは、行政だけではできませんので、地域の協力というところも要るわけをごさいます。それぞれ、学校・家庭・地域・行政、ということをよく言いますけれども、われわれもふるさと教育で、それぞれの役割をしっかり果たしていこうじゃないかというところを思っております。</p> <p>いろんな形のやり方がありますけれども、地域の方々の力もお借りしながら、子どもたちの人材育成という部分については、しっかりと子どもたちが地域に貢献できるような取組を、四万十高校の中で、ふるさと教育という部分も含めて、つくり上げていきたいと思っております。</p>
八田委員	<p>林業は今、すごく注目されていて、高知県として、産業振興としてやっている林業大学校には、全国からたくさん参加者が今、押し寄せている。</p> <p>ところが、農業高校の林業は、なかなか定員を埋めることができない、何かものすごく大きなギャップができてしまっている。そこはおそらく、実際に世の中が動いているものと、学校のやっていることが、少しギャップがあるんじゃないかなという気がします。</p> <p>ぜひとも、大正地域なり十和地域が、こんな将来を目指すんだというのがあって、だから、こんな子どもたちを育てたいという、どんどんお互いに情報を出し合っていて、それでいい教育プログラムを作りたいと思いますので、ぜひ、よろしく願います。ありがとうございました。</p>
田村教育長	<p>それでは、だいぶ時間も来ましたので、よろしいでしょうか。</p>
各委員	<p>構いません。</p>

○会場からの意見聴取

田村教育長	<p>それでは、予定しておりました皆さんからのご発言は以上ですけれども、会場の中から、もし、ご発言をされたいという方がおられましたら、お受けいたしたいと思っておりますけれども、いかがでしょうか。</p> <p>なお、ご発言の際には、学校との関係とか、お名前をよろしく願います。</p>
須崎高校 PTA 会長 小野	<p>須崎高校 PTA 会長です。よろしく願います。</p> <p>先ほど、資料の中でもご説明いただいて、重複する点があるかとは思いますが、平成 31 年の統合に向けて、今のところ両校、大きな問題もなく、統合に向けて順調に進んでおります。</p>

	<p>しかし、これからの須崎総合高校に、どのように力を入れて、どのように発展させるかっていうことが、今後の課題と考えております。</p> <p>その一端として、普通科を進学拠点として認定していただきたく、お願い申し上げます。地元に進学拠点ができると、通学に伴う時間や、それから費用なども軽減されます。そして何より、親としては、地元という安心感を得られることができます。進学から就職まで、生徒たちの多様な進路希望に対応できる学校になると思います。</p> <p>統合という新たな機会に、この須崎総合高校を進学拠点として認定していただけますよう、ご検討よろしくお願い申し上げます。</p>
田村教育長	<p>ありがとうございました。要望書もいただいておりますので、しっかりと検討させていただきたいと思います。</p> <p>そのほか、いかかでしょうか。</p>
四万十高校同窓会副会長	<p>四万十高校の同窓会の副会長です。</p> <p>この問題、少子化等々がありますが、田舎の学校から言わせてもらいますと、高知、中村、須崎、そこら辺の学校全部で、もうすぐで、高知県全部の高校生を受け入れられるぐらいな定員だと思います。</p> <p>そこら辺を考えていただかないと、田舎の子どもたちは、私は十和村いう山奥に住んでいますので、携帯も入らん所が多いんです。今、IT化とかなんとかいうて、携帯とかで宿題とか、そういうのも出てくる時代に、携帯も入りません。</p> <p>そういう所からすると、どうしても都会へ出たいとか、そこら辺になってくるようになります。そこらでやはり、高知の市内とか、そこら辺の学校の再編とかを考えてもらって、市内の学校で、高知市、中村市、安芸市とか、そういう所で、全部の県の高校生がまかなえるような定員のはずです。これからは、特に、そこら辺を十分に考えていただきたいと思います。</p>
田村教育長	<p>ありがとうございました。「前期実施計画」の中では、例えば、高知西と高知南の統合とかいうようなこともしております。全体的な生徒の減少をにらんで、色々と考えていく必要があると思っております。どうもありがとうございました。</p>
窪川高校同窓会長	<p>窪川高校の同窓会長です。どうかよろしくお願いいたします。</p> <p>私、本当に、地元で高校が2つあるというのは、四万十町の誇りだと思っております。特に先ほど、副町長から四万十町の取組ということで、地元の子どもたちを育てるために、大変大きなプロジェクトができて、地元高校を応援してくださっているということに、大きな励みを受けました。</p> <p>私は、窪川高校の近くに住まいしております。地元高校生とは、朝夕に顔を会わします。その時に、子どもたちが本当に礼儀正しく、またマナーもよろしいです。</p> <p>そして、昨年11月に、「じゆうく。」フェスタに私も、どんな授業をしているのかなということで、参加させていただきましたが、四万十高校生、窪川高校生が、生き生きとその授業に取り組んでおりました。</p>

	<p>そして特に、この「じゆううく。」に参加している生徒たちが、すごく、会って挨拶をしても、生き生きとしている姿を見受けられます。</p> <p>冬の始まる時期になると、高校で育てたシクラメンを町内に販売に来ていただいたり、もうすぐ白菜を売りに来ていただいたりということで、地元住民とも、非常に親しい関係になっております。</p> <p>そういうところで、私たち地元にとって、高校があるということ、本当に少子高齢化で、先ほど、四万十高校の同窓会副会長さんからも発言がありましたけれど、2つの高校が私たち地元にとっては、なくてはならない学校だと思えます。</p> <p>私たちもふるさとを愛するために、子どもたちと一生懸命接していきたいと思いますが、われわれ、もう高齢者の域に入っておりますが、高齢者も子どもたちから多くのものをいただいております。</p> <p>そういうおかげで、ぜひとも、教育委員会の皆様には、地元2つの高校を何卒よろしく願いをしたいと思えます。</p>
田村教育長	<p>ありがとうございました。2校とも存続してもらいたいという、そういうご意見ですね。</p>
窪川高校 保護者	<p>窪川高校の保護者です。お世話になります。私も保護者として意見を述べさせていただきたいと思えます。</p> <p>私も県外で、自分が4年間勤めて、もうぜひ高知県に帰って来たいと思って、帰って来た一人です。地元に戻って来て、もう26年ぐらい経ちます。本当に今振り返っても、高知県へ帰って来て本当によかったと思っております。</p> <p>先ほど、お話にありましたように、私も窪川高校を出まして、それから、娘も窪川高校に通っております。</p> <p>窪川高校さんのバックアップ、そして「じゆうく。」さんのバックアップ、そして行政側からの通学費の補助のバックアップというふうに、先ほど、教育長、それから副町長もおっしゃっていたとおりに、本当にこの3つのバックアップを受けたおかげで、私たちの娘も非常にありがたいことで、先ほどおっしゃってました三重県のサミットの方で、12月30日の新聞に載っておりましたが、生徒会のメンバーの中から4人が選出されて、全国で発言をしてきまして、素敵な賞も取ったようです。</p> <p>本当に窪川高校に入れたからこそ、こういった経験ができたのではないかと思います。本当にありがたいと思っています。</p> <p>それで、今日も9時まで勉強するんだと言っていました、「じゆうく。」さんの方でも勉強だけではなくて、いろんなことを、様々なことを、教えていただけるといふふうに娘が言っていました。</p> <p>本来ならば、中学校から窪川高校へ流れていくのが一番なんですけど、保護者の中では、最近、看護師の方も人気みたいで、高知東高校の方に流れたりとか、そういう話も聞きます。</p> <p>どうしても、そういう専門職の方に流れる部分もあったりして、自分たちは地元がいいよと、そういうふうな感じで運動もしていますが、本当は、子どもさんが増えたら一番いいのは重々承知なんですけど、引き続きこれからも、自分たちもアピールしながら、増やしていけたらと思っています。</p>

	<p>これからも、窪川高校、四万十高校をよろしく願います。ありがとうございました。</p>
田村教育長	<p>ありがとうございました。学校の存続ということは、一番に生徒の数を確保するということが大事でございます。学校側も努力をもちろんせんといかんですけども、ぜひ、保護者の皆さん、周りの皆さんに色々と、ぜひPRというか、窪川高校に行くようなお話をさせていただくと大変ありがたいと思っていますので、どうぞよろしく願いたいと思います。</p>
四万十高校 を守り育て る会	<p>「四万十高校を守り育てる会」で今、活動をしています。</p> <p>それこそ四万十高校、私の子ども3人も四万十高校を卒業して社会人として働いています。本当に18歳まで、自分の膝元へ置いて一緒に生活しております。地域でやはり、ふるさと運動ができるというのは、自宅から通える学校があるということは、素晴らしいことだと思っています。</p> <p>そして四万十川。今、四万十高校は四万十川と橋原川のちょうど見える所に、学校が建っています。素晴らしい環境の中で、先ほどもちょっと述べていましたけども、自然環境コースというのは、全国にもう馳せていますけども、そのなかにあっても、やはり今、新しい林業、実は以前には、四万十高校には林業科がありました。そういうなかで、時節とともに林業科がなくなったわけです。</p> <p>まさに、また今、新たに林業、新しい林業ですね、ハイテクな林業が求められております。自然環境コースをもう少しグレードアップして、その林業科に向けての流れも考えていただけたらいいんじゃないかなと思っています。</p> <p>それから、先ほどから何回も出ていますけども、「じゆうく。」のこと。「じゆうく。」と、それからソフトボール、それからジャズ、この3つが大きなキーワードで、四万十高校は今、一歩前に出てみようということで、僕らも力を入れております。</p> <p>そういう面においたら、窪川高校は窪川高校で農業の町でもあります。この町は、窪川だけでも2,000ha（ヘクタール）という田んぼ、農地があるわけです。やはり、大正・十和はどうしても山間になりますので、この町が合併して642.06㎢（平方キロメートル）、淡路島より広いです。このなかにはやはり、それぞれの特色をもった学校が残っていく。当たり前のことかなとは思いますが。</p> <p>先ほどから出ますように、寮、これを最大限生かしながら、ほかから入って来ても、しっかりと自然環境の問題が学べる場であるということ。それと、好きなジャズができたり、好きなソフトボールができたり、小学校・中学校、本当に全国を常に狙っておる地域です。</p> <p>そういうふうに思えば、後方でしっかりと仕上げていかなくてはいけない、そういう面では今、素晴らしいコーチが来て、どんどん伸ばしてしてもらっています。そういう面において、もっと宣伝をしなくてはいけないのかなとは思いますが、学校側の方も、そういう面では、林業のことも含めまして、この特色をそれぞれ、大正・十和地区と窪川地区の特色を考えていただいて、この町で2つが存続できるように、よろしく願いたいと思います。</p>

田村教育長	ありがとうございました。広い地域には2校要るのではないかと、い うようなお話かと思えます。 それではそれ以外に、もうよろしいでしょうか。
会場	なし。

【閉会】

田村教育長	それでは、大体ご意見も出たようでございますので、以上で教育委員会 協議会の方を終わらせていただきます。どうも本日はありがとうございました。
-------	--

平成 年 月 日

教育長

署名委員